

生誕250年 古典派とロマン派 “ベートーヴェン” 第3回
を繋いだ楽聖

プログラム

今年生誕250年に当たるドイツの生んだ偉大な作曲家ベートーヴェン特集するシリーズの第3回目をお送りします。
32曲あるベートーヴェンのピアノ・ソナタの中期を代表する**ピアノ・ソナタ第14番嬰ハ短調**は「月光」の名で親しまれています。曲は1801年に完成され、ベートーヴェンは同じ作品27の第13番の2曲を「幻想風ソナタ」と呼びました。曲は思いを寄せていたベートーヴェンのピアノの弟子であった伯爵令嬢ジュリエッタ・グィチャルディに献呈されましたが、この恋は実らず、失望したベートーヴェンはやがて「ハイリゲンシュタットの遺書」を書くこととなります。「月光」のタイトルの由来は、詩人のレルシュターブが「スイスのルツェルン湖の月光の波に揺らぐ小舟のようだ」と例えたことによっています。第14番はゆっくりと始まる幻想的で美しいロマンを感じさせる第1楽章、軽やかに穏やかな第2楽章、情熱的で激しいソナタ形式による第3楽章など、従来の速いアレグロで始まる第1楽章の常識を覆し、自由で即興性の強い名曲です。ベートーヴェンの弦楽四重奏曲は最初の作品18の3曲が1798年に着手され、最後の第16番は1826年に完成されました。**弦楽四重奏曲第9番ハ長調**は1806年に作曲された第7番から始まる作品59の3曲目に当たり、当時のオーストリア大使ラズモフスキー伯爵の依頼によって作曲された3曲は、**ラズモフスキー四重奏曲**と呼ばれています。曲はこれまでの四重奏曲より形式的にも曲想的にもスケールが大きくなり、シンフォニックな音楽空間を創り上げています。序奏を持った躍動感溢れる堂々たる第1楽章、民謡的なメランコリックで叙情的な第2楽章、そしてフーガの手法を用いた壮麗な第4楽章など、斬新で緻密、中期を代表する傑作です。**交響曲第5番ハ短調**は第6番と共に1808年12月22日に初演されましたが、最初のスケッチは1803年に書かれ、何度も練り直して緻密で優れた構造を持った作品に完成させました。「運命」の名称は第1楽章冒頭の主題に対してベートーヴェンが「運命はかく扉をたたく」と説明したことから来ていますが、この曲には恐怖、悲劇、争闘といった運命と立ち向かい、溢れる闘志と不屈の精神で運命の波を乗り越える姿が見えてきます。あらゆる交響曲の中で最もよく知られ、愛されている名曲です。1810年ゲーテの悲劇「エグモント」に感銘を受けたベートーヴェンは同名の劇音楽を作曲しました。序曲と9曲からなる作品ですが、今日では「**エグモント**」序曲のみが頻繁に演奏されます。悲劇の愛国者エグモントの半生を描いていますが、序曲は2つの主題が幻想的に絡み合い、愛国の炎が燃えるような勝利のクライマックスを迎えます。1810年には同じゲーテの詩に付けた3曲の歌曲を書きました。「**悲しみの喜び**」は第1曲で、悲しみに浸りながらその自分に酔ってしまう、という複雑な心情を歌っています。ベートーヴェンの歌曲ではよく知られた名曲です。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827):

ピアノ・ソナタ第14番嬰ハ短調 op.27-2 “月光”

第1楽章 アダージョ・ソステヌート 第2楽章 アレグレット 第3楽章 プレスト・アジタート
ブルーノ・レオナルド・ゲルバー(ピアノ) (1990.3.13 オーチャード・ホールでのLive)

弦楽四重奏曲第9番ハ長調 op.59-3 “ラズモフスキー第3番” ~ 第1、第2、第4楽章

第1楽章 アンダンテ・コン・モート~アレグロ・ヴィヴァーチェ
第2楽章 アンダンテ・コン・モート・クワジ・アレグレット
第3楽章 メヌエット、グラツィオーソ 第4楽章 アレグロ・モルト
東京クアルテット (1993.9.6 モントルー、コレジオ・パピオ教会でのLive)

*** 休憩 ***

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827):

歌曲 “悲しみの喜び” (ゲーテによる3つの歌曲 op.83-1)

エディット・マティス(ソプラノ)/ハインツ・メディモレツ(ピアノ)
(1984.7.6 ケルンテン、オシアツハ修道院教会でのLive)

“エグモント” 序曲 op.84

小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(2016.4.10 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

交響曲第5番ハ短調 op.67 “運命”

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 第2楽章 アンダンテ・コン・モート
第3楽章 アレグロ、アタッカ 第4楽章 アレグロ、プレスト
オイゲン・ヨッフム指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1986.4.17 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)